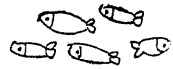


森の組



新庄よしこ

森の組は去る四月八日入園したる年少組、はじめて保育を受けしより約四十日あまりを経たる幼児の一組。約半数の幼児は當初より附添と離れ、その後日を追ひて附添へるもの少なくなり、今は朝別るゝ時に泣く子一人、それも二三分もたてば泣き止み得。されど他の泣くを見ては、或は何かの拍子に、とかくシクシクと泣きたくなるものは未だ二三人はあるといふ状態なり。

豫定

月	談話	旗づくり
火	遊戯	カタカナ調査
水	自由畫	本校へ
木	積木	塗繪
金	談話	遊戯
土	談話	遠足
		本校へ

五月二十三日(月)

早く來たる三四人の幼児、長椅子にもたれて何かと話しあひ居り、これに一人づつお早うといひかく。朝の挨拶大かた自ら云へども、中には言ふべきとは知りても口に出していひ得ざるものあり、又全然知らぬもあり、中にはさげたるバスケットが床につかればかりの丁寧なるあり、特に家にて云はれて來たるものらしく、然しこれも始の間のこと、兎に角いづれにしても朝は一人づつに言葉をかけたきもの皆が出揃ふ迄と是等の幼児と校庭を歩いてゐると砂場に落葉が堆いので箒を取りに行かうとしたら、引ちがひに年長組男児の一隊が先生のお手傳にてせつせと掃き始めし故今日はずをつけないで置く。

わが家の庭に咲きたればとて子の父なる人、ばらの枝を持ちて來られたれば室に入りて壺の水を新らしくす。

電話、幼児宅より、病氣ではありませんが、あまり毎日毎日泣いて我がまゝ申します故今日は休ませて見ようと思つたので、とのこと、大低附添を離しても二三日にてすつかり一人になれるのに丁子はこれにて三週間目、今日も朝の一時を大騒ぎに過すことゝ覺悟して來たるに少々氣ぬけの形。

談話。みな揃ひたる様子、室なるはそのまゝ、ぶらんこのも、砂場のもよびいれてお話と云へば、みなく小さき椅子を持ち來て膝のまはりをとりに圍む。

——僕きのふ日比谷公園に自動車で行つたの——
この發言にて話しあひへとなだらかにすゝんでゆく。

——僕はね、昨日お母さんがガマ口買つていらつしやつたの。

——お家で活動寫眞したので、お父様がして下さつたのよ——

つゞいて詩の暗誦、まづ左の詩を二度ばかり讀みてきかす、始めてなれば短きものを選ぶ。

雨はどこにも降つてゐる

木にも家にも降つてゐる

私の傘にも降つてゐる

海の船にも降つてゐる

先生が云ふ通りみんな一緒に言つて見ませうね。

雨はどこにも降つてゐる

先生と幼児一同、

雨はどこにも降つてゐる

かくて次々一句づつ唱へて全部を幾度か繰返す中に覺えこみたるが四五人あり、すん／＼先にたちて唱へて居る。

旗作り 日の丸 半紙大の白模造紙、圓を描きたる赤模造紙、細き竹、玉にすべき黄色模造紙、男兒より始む。幼兒は鉄にて丸の線を切るのみ。すぐ出來てしまひ、先生が赤い丸を貼つて旗竿につけてすつかり出來上る迄その子は自分の旗をヂツと見守つて居る。左ぎつちよの子の側を離れずついて居て、右手のみを使はせたり。この旗みなく／＼氣に入りたる様子、今日持ちて歸ると云ひしが、海軍記念日の日にと約束してあづかり置く、竹やあゝ竹えいと大きな聲す。見れば残りたる細き竹をかつきて、町々を賣る様なり、つゞいて、竹やあゝ青竹えい、竹やあゝ旗竿をいと

いひ歩く。聲といひ調子といひなかくうまきもの。

折から小雨になりたればみな室に入り來。五人は、齒の治療の爲小學校休養室に行き、あとは室にて繪雜誌みるあり、ポールドに描くあり、繪雜誌中に雪だるまの繪あり。

——雪ね、もうせん家に降つたことがあるの、

——あら、先生の家にも降つたのよ、

——海にも降つたね、

今朝の雨の詩を思つてであらうか。

お辨當。

午後は思ひ／＼に遊べる中に勝美、地のくぼみたる所に釣りの糸をたれて居るので、こゝはお池ときげば、うん、こゝはどぶから續いてゐる池なんだ、と云ふ。お魚が泳いで來たのねと云ひながら落葉を糸の尖につけてやればうれしさうなり。なるほど、畫用紙に魚の繪を描かせて、これを切り、釣りの遊びも面白からんと、これにて來週の製作の一つを思ひつきたり。

お歸りの支度する頃俄に眞暗になり、廊下など人の顔もわからず、あゝ、夜だ、夜だ、夜になつちやつた、先生電氣つけてよと云ふ。驟雨はげしくみんな歸りしはいつもよ

り三十分もおくれていることなり。

二十四日（火）

昨日に引かへ今日の爽々しさ。自ら心地よく保育室に一人づつを待ち受く、何れも砂場へと出て行く中に母と來し子なかく離れず（いつもは平氣なるに）何かと云ひては母を引ぱりおく。浩さんと昭二さんと來たら歸つてもいゝなと云ふ、これは母と一緒に居て貰ひたき口實なれば、ちよつとは強く泣いても母に歸つて貰ひたるにすぐ泣き止みたり。

遊戯

今日は森の組の遊戯の日、先きにピアノのそばに集りて唱歌す「砂のトンネル」「夕立」等はよくうたふ。

かぢやさん。

カツチン カツチン 仕事する

かぢやのおぢさん あついだらう

眞赤にもえる火のそばで

汗を流して仕事する。

これは始めて今日うたふので一句づつくり返し／＼共に

うたふ。

次に遊戯

夕立、結んで開いて、貝拾ひ、汽車が走る、蝶、ポー

トレース、こまどり、スキツプ等。

これの終れる頃外國人の參觀あり、ピアノ弾く手は一才困りしがむづかしきものもなくてまづくよかりし。おそく丁子來り女中歸りしに、大泣きに泣きたれば、抱いて外に出で、附添のあとを追ふやうにして庭をぐるぐるせる中に嫌疑なほりたり。かたくなに結ばれたる小さき心の、日を追ひてとけゆくを見るは保姆ならでは味ひ得ぬことなるべし。

カタカナの調査

先週は數なりしかば、今日は字を調査す。幼稚園を終る頃大かたの幼児カタカナを讀み得るやうになるものなれば入園當初のものを調べ置きたきころにて、一枚のカードに一字を書き一人づつきゝて。

調査人員 二八

全部知るもの 七

全部知らぬもの 一〇

約十字 三

約二三字 八

○どの字を見せても機械的にアイウエオ、カキクケコとこの順に云ふあり。

○二三字知れるはみな自分の名。

○全部知らぬと云ふ、中には知つて居てもきまりわるく發言の出來ぬためのものあるやうなり。

右を一枚の紙に表にして記しておく、保育期のかはり目には調べて記しおかんとてなり。なほこれは、積極的に字を教ふるためにする方法にはあらず。今日はこれに長く時間をとりて、お辨當は少しおくれたり。

午後大方砂場にてあそぶ。積木を電車にして、山、トンネル等を作りまはるに夢中なり。木の葉を掃き、又は園ひの外にこぼれたる砂を掃きよせ居たるに「先生があんなにきれいにして下さる」と云ふ、思ひがけざりし言葉なり。積木を壁に運びおくつもりなりしが今日のこのよき日に壁に入るも惜しくて外にて遊びつゞけたり。

二十五日(水)

うす曇りの、しかも風の荒き日なれば大方室にあり。二

人はかり便所のたゞきに電車の繪を描いて居りしかば室のポールドに伴ひ來て各色の白墨を與ふ。一人が一間程の艦とたこといかをかきたれば二人は潛航艇を二隻。一方のポールドは赤、黄、綠等の線にて亂塗のさまなり、されどこれを見てゐると、こゝは停車場、こゝはトンネル、お山だなどと云ひながら描いてゐるので自分が電車になつて、レールを走つてゐるところ、線は走つてゐるしと見えたり。それが二三人で走るのでかくはめちやく／＼に見ゆれどやがてこの一線が美事なる繪となるべきはじめと思はれたり。男の子にとりて線路はかなり魅惑のあるもの、哲彦が大きな紙に線路と、走つてゐる電車の繪を描きたるがあり、この繪の前に立ちては人さし指にてレールを撫でたる子四五人を見かけたり。心の中には走りたるなるべし。

女兒九人、相連りて小學校女學校本校等歩き樹木を調べに行く、知つて居りしもの、

木 桐、松、つゝじ、あぢさゐ、いてふ、びわ、笹。

草花 すみれ、けし、しらん、金魚草、石竹、はら、ス

キートビー、菊。

野菜 さやえんどう、パセリ、そら豆。

さきのポールドの繪に引きつゞきめい／＼帳面に自由畫を始む。入園當初より非常に大きな繪を描くもの四五人ありて、いつも一枚に描きつくせず、二枚つゞきにするので、この爲にとて立ちて大きな繪を描き得る畫架を求めて與ふ。思ふ存分描くようなり、これ今は一箇なれば、兩面即ち二人づつはこれにて描く。

體格検査の時休みたるもの四人、今日は揃ひたれば休養室に連れゆき身長、體重、胸圍をはかりおく。

午後積木室より積木を森の組の室に一人づつ運ぶ。軍艦を作らんとてなり。されど大積木は池の組にて使ひ居り、どうしても借されないと幼兒に斷られしかば仕方なく、つかひ残りのみ今日は運び置く。大方よごれ居りし故一同にて雑巾がけす。

二十六日（木）

軍艦。積木にて。

昨日より室に用意してありし積木に大きな箱積木を加へて艦の土臺（二間位の大きさ）出來かゝり居り、實習生作る。早朝より來たる子等はを手傳ふ。土臺の完成、欄干

大砲等出來上る、次々に手傳多くなり煙突はかようになどといふ。その他種々の注文によりなるべく是に添ふようにすれども、折角の中出が危険にて出來ぬこともありし。

是れ年長組ならば全然幼兒の發案製作に任せてすべきなれど年少組なれば保姆が主になりてす。

僕は車掌になつて乗りたいなと茂いふ、水兵さんでせうと云へばげざんなる顔。今のところ海陸共に車掌の權限と思ひ居るらし。

男兒本校に行く豫定なりしがあまり風強く、室にて塗繪と變更、女兒もはいり來て塗繪がしたいと云ひたれど少し待ちて、と云へば長椅子に腰かけて靜かに待つ。

風の強きのみならず何となくをかきき天候、保育し難き日とつく／＼今日を思ひたり。

お辨當の時用意が出來たれどもすぐ食べず、箸を持つ前に少しの間靜かなる時を過すようしたきものと思ひ、齒刷子掛の自分のものゝ位置を一人づつたしかめさせる間デツと待たせおく。これ少し長くかゝりし爲にや智久お食後のバナ、食べてしまひしに氣づく。

食事中一人の男兒箸が落ちたと泣く、洗ひたるに又泣く、

側に行き食べよきようしたるに又も泣く、たう／＼おしつこと云ふ、びつくりして大急ぎ連れ行きぬ。こんな時すぐ氣がつくべき筈なるを、しかもこの子は何かにつけて人手を借りず自分にてする子なるにあまり迂濶なりし。特に几帳面なる性質故食事中のおしつこに困りて泣きたるなるべし、愈々恥かしく思ひたり。午後は年長組にて製作せる汽車の走るを遊戯室にて見る。鐵道開通式見物といひたる状景、組の英雄豪傑もこの汽車に吸はるゝやうしづかにながめ居り。子供にとりて興味を中心なる機關車、客車、繪によりて僅にその憧憬を滿たし居りしそれが今、目の前を走つてゐる、子供が乗つて居る、實際のものでは好きでもそばによつては威壓を感じるあの汽車が今同じようなる友達が動かしてゐるこの有様。先生もわが組の子の心を察しながら、されど面白く見物して居る中に歸りの時間とはなりたり。

二十七日（金）

朝、艦にマストを立て、日章旗、軍艦旗を掲ぐ。

談話。今日は實習生のおはなしなり。

○海軍記念日のことを簡単に、お母さまにきいたといふ

もの二人あり。

○赤ちゃん羊、かなり長き筋なるも終り迄靜かに聞いて居りし。

○あとで本校にお辨當持つて遠足に行くといひしに立ち上りて皆喜びたり。

遊戯。火曜日のものと殆んど同じ、牛若丸を始めてしたるによく知つて居り、いつも遊戯せぬもの迄勢よく仲間ははいりしはうれしかりき。

遠足のため買ひたる菓子、ビスケット一枚(大)ベルベツト二ヶ)を紙につゝみ一人づつに渡してビスケットに入れさせ帽子をかぶり、薙、麥湯等用意して本校に行く。クロバーの緑深し。先に來し年長組の一隊が大太鼓小太鼓にて奏でし樂隊の今終りし様子、惜しき處なり。薙をしきのべ早速お辨當を開く。これを見てさきの組の子もこゝで食べたいと先生にいふ。一二押問答の末それではといふことになりたるらしく、はるばるお辨當をとりゆき、この組は小高きところ、ヒマラヤシーダーの木かげにて食事なり、麥桿帽子の小父さん、(本校教授)が通りがかりにうらやましいなあとバスケットをのぞいて行かれた。食後こゝに

て駈けまはり皆汗をかきたり。幼稚園に歸つてお歸り迄しばらく腰かけて休み、かねて約束の旗を持ちて歸る。

お天氣の都合にて急に遠足を加へたれば今日のプログラム盛り澤山にて、それに俄にあつくもなりし故か、ぐたぐたに疲れてしまひぬ。

二十八日(土)

内なる三四人が軍艦に乗り居り、それ〴〵の部に働くをしばらく見てありしが、艦が出ますよ、そら動きますよ、あぶない〴〵海の中に落つこちまふ、など相當にこの大きな艦を我がものにして遊ぶようになりたり。

談話

ほんの四五人まはりに居りし女兒と共に、

雨はどこにも降つてゐる

木にも家にも……

と暗誦してゐるとめい〴〵椅子を持つて來て一緒に唱ひ始めぬ。もうすつかり覚えこんでしまひし様なれば、「それでは一人づつでいひませう和子さんは」と云へば素直に立ちてすらくと云ひたり、されど何やら頬のふくらみ居

るに、

和子さんの頬べたがふくらんでゐる

おいしいものでもはいつてるの

とこれもうたの様に云つて見たら、ニコくして、え、キャラメルよ、と。當人も平氣でゆつくりとしやぶつてしまひ、まはりの小さき友達も別に欲しき顔もせずよく育てられて來し子等よとあらためて顔々を見まはしたり。つゞいて四人ばかり一人にて唱ふ。では今度はお唱歌を一人であつて見ませうか秀威さん……これはそれ／＼得意のものを一人或は二人にてうたふ、夕立、お砂のトンネル、牛若丸等なり。純男の獨唱にはいつもこの先生のピアノの音では氣の毒と思ひつゝきいて居り。幼稚園生活が伴侶の力でその子／＼によき教育が出来ることはいふ迄もなき事ながら、集の力をかりてのみならず獨自にて自分の思ひを發表することゝろを養ひたく、唱歌、おはなし等一人づつにさせることあり。これも談話の中にふくむ。

男兒は未だ校内の木を見に行かざりし故實習生一人が四人づつ連れてこれを調べに出かけ、女兒は砂場にて洋菓子屋を始め。曇り日なれど風なく、人影少なき篇か、めづらし

くも今日の庭は靜かなり、されば心ゆく迄砂遊びに餘念なきすがた美しと見てありしが、本校より歸り來し男兒等、新庄先生！ こんなにいろんなもの取つて來たの、紙をひろげて見れば、てんとむしとその幼虫、麥の穂、木苺の實、草の葉種々、その他木も見て來て、みんなにいて、ふと桐の區別がよくわかりましたと實習生はいひたり。

土曜日なれば十一時半。これにて歸りの支度す。

文部省主催保育講習

本年の文部省主催保育講習は七月二十二日より同二十七日まで、東京女子高等師範學校に於て開催せられる豫定の由であります。詳細は追て官報にて發表せられる筈であり、申込手続きにおくれないやう、又その手續きを間違はれぬやう豫め御注意を希望して置きます。